

## <文化>

### 父親に対する娘の嫌悪感

● 阿部 洋子\*

#### 1、目的

心理学における親子関係の研究の数は、母子関係のものに比べて、父子関係のものは少ない。また、その研究も、父性の発達、育児への関りなどが多いのが現状であり、本論文で取り上げる、父親に対する「嫌悪感」ないし「否定的感情」に関する研究は多いとはいえない。

ところで「父親に対する嫌悪感」としては、「気持ち悪い」、「うざい」、「面倒くさい」、「イライラする」、「臭い」などが挙げられよう。また、世の父親たちは「娘が父親の衣服と一緒に洗濯をしてほしくない」と言われて、ショックを受けると聞かれることがある(白田;2014)。実際、ゼミなどで学生たちに対して聞き取りを実施すると、「一緒に洗っていない」、「一緒に洗わないでもらっている」、「一緒に洗っているが、本当は嫌だ」などという回答が得られることがある。

さて、加齢臭などは生理的变化によるやむを得ないものであるにも拘わらず、化粧品会社が男性化粧品の売り上げを増加させようと、意図的に宣伝したことにより、必要以上に問題視されているのかもしれない。また電機メーカーや家電量販店が一人分の下着を洗うための小型洗濯機の販売実績を伸ばすための戦略として、父親と娘の洗濯物の分離が促進されているのかもしれない。実際に、納豆やチーズなど独特の臭いに対する嗜好には嫌悪感が伴い、それらの研究によれば、臭いに対する好悪は生得的なものであるよりは、社会・文化により学習されたものだとされている(ハーツ;2012)。

一方、ラットによる実験レベルではあるが、発情期のメスは、遺伝的に近いオスの体臭を避け、遺伝的に遠いオスの体臭に引きつけられるという結果が報告されている。それは、近親交配を回避するためのメカニズムが遺伝子レベルで組み込まれているためではないかという解釈が提供されている(Wedekind & Furi;1997)。興味深い結果ではあるが、まだ人間のレベルで検証されたとはいえないため、娘が父親の臭いに対して嫌悪感を持つことを、遺伝子レベルの問題として説明することは性急といえよう。

また、嫌悪感を人間の進化の歴史として捉える研究もある。その基礎には、「まずい味＝毒物への嫌悪」があり、次に「中核的嫌悪＝食物、排泄物などへの嫌悪」、「動物的性質への嫌悪＝性、不衛生、毀損された外面への嫌悪」へと進化し、更に「対人嫌悪＝よそ者に接触することへの嫌悪」、そして「道徳的嫌悪＝道徳違反への嫌悪」へと進化するというものである。したがって、嫌悪感はある特定の社会で適応的に生活する上で重要な役割を果たすのだと述べられている

(Rozin et al.;1997)。もしそうであるならば、父親に対する嫌悪感とは、「よそ者」を排除するための心理的メカニズムや、「違反行為」をした者に対する強い批判の心や、善なる行為を侵害されたと感じる不快感が関係しているといえるのかもしれない。

そこで本論文では、①父親に対する娘の嫌悪感の種類、②嫌悪感を抱く背景要因としての夫婦の関係性の良し悪し、について質問紙調査を実施することで検討を加えていくこととする。

\* 臨床心理学科 准教授

## 2、方法

### (1) 調査対象と調査時期

都内にある A 大学の女子学生101名 (平均20.74歳 : SD=0.76) に対し、平成27 (2015) 年7月17日、授業時間中に、質問紙を配付し、簡単な説明を加え、無記名で回答してもらい、授業時間終了と共に回収した。

### (2) 質問紙の構成

- ① 父親に対する嫌悪感尺度：小野寺 (1984年)、菅生 (2001)、石丸 (2013) などを元に、父親に対する嫌悪感尺度20項目を作成した。質問項目は、いずれも日常生活の中で、父娘の間で、実際に起こる可能性が高い行為が選定された。「全く気にならない：1点」から「非常に嫌だ：5点」までの5件法で回答を求めた。
- ② 父親に対する嫌悪感についての感情表出語：父親に対する嫌悪感を表わす感情表出語として思いつくものを数個挙げ、4年生ゼミの時間中に10名の女子大学生により、その適切性を判断してもらおうと共に、新たな項目を加え、独自の選択肢を作成した。最終的な感情表出語として「気持ち悪い」、「うざい」、「面倒くさい」、「イライラする」など8個を決定した。回答は、当てはまるもの、すべてに○印をつけさせた (複数回答形式)。
- ③ 夫婦仲の尺度：両親の仲がどの程度良いかについて「仲が悪い：1点」から「仲が良い：5点」までの5件法で回答を求めた。更に、なぜ夫婦仲が良いあるいは悪いと思うかを、4年生ゼミの時間中に10名の女子大学生に自由記述で回答を求め、それらを元に独自に選択肢を作成した。回答は、当てはまるもの、すべてに○印をつけさせた (複数回答形式)。

## 3、結果

### (1) 父親に対する嫌悪感得点と因子構造

#### ① 父親に対する嫌悪感得点

父親に対する嫌悪感尺度の20項目について得点化を行った。嫌悪感が強ければ高得点になるように「全く気にならない」を1点、「非常に嫌だ」を5点とした (20~100点)。その結果、20項目すべてに「全く気にならない」と回答した者 (合計得点=20点) が1名、一方、20項目すべてに「非常に嫌だ」と回答した者 (合計得点=100点) が1名であり、平均嫌悪感得点は49.03点 (SD=17.40) であった。

次に、20項目の中で、最も嫌悪感得点が高かったのは、「Q1-16 あなたの布団 (ベッド) で父親が昼寝をする」(3.68点 (SD=1.35))、「Q1-9 父親が使った割り箸を使う」(3.23点 (SD=1.51))、「Q1-10 父親が自分の好みの女性のタイプについて話をする」(3.21点 (SD=1.27))、「Q1-14 父親があなたに「女らしくなったね」と言う」(3.19点 (SD=1.41)) であり、父親との間接的な接触や、性にまつわる話をする内容であった。一方、嫌悪感得点が低かったのは、「Q1-6 父親と一緒にテレビを見ながら話をする」(1.73点 (SD=1.05))、「Q1-3 父親が自分の子供のころの話をする」(1.86点 (SD=1.04))、「Q1-8 電車であなたのすぐ隣に父親が座る」(1.88点 (SD=1.19))、「Q1-17 1日の出来事について父親と話をする」(1.90点 (SD=1.11))、Q1-20 あなたの着と父親の下着を一緒に洗う」(1.93点 (SD=1.06))、「Q1-4 居間に父親と2人きりである」(1.98点 (SD=1.14)) などであり、さり気ない会話が低得点であった。

表1 父親に対する嫌悪感尺度の項目と因子負荷量（主因子法、バリマックス回転）

項目内容	第1因子 父親とのコミュニケーションと接触 に対しての嫌悪感	第2因子 父親が使ったもの に対しての嫌悪感	第3因子 間接的接触に対し ての嫌悪感	平均	標準偏差	
Q1-6	父親と一緒にテレビを見ながら話をする。	0.91	0.17	0.17	1.73	1.05
Q1-17	1日の出来事について父親と話をする。	0.81	0.12	0.25	1.90	1.11
Q1-4	居間に父親と2人きりである。	0.73	0.33	0.19	1.98	1.14
Q1-8	電車であなたのすぐ隣に父親が座る。	0.64	0.35	0.39	1.88	1.19
Q1-12	父親の肩を揉む。	0.63	0.48	0.20	2.07	1.25
Q1-13	父親のぬくもりの残るところに座る。	0.60	0.48	0.30	2.13	1.25
Q1-3	父親が自分の子供のころの話をする。	0.59	0.26	0.34	1.86	1.04
Q1-1	熱があるとき、父親があなたのおでこに手をあてる。	0.58	0.54	0.24	2.69	1.45
Q1-11	父親がだらしない格好でゴロゴロする。	0.43	0.09	0.43	2.10	1.25
Q1-10	父親が自分の好みの女性のタイプについて話をする。	0.41	0.08	0.27	3.21	1.27
Q1-14	父親があなたに「女らしくなったね」と言う。	0.40	0.34	0.28	3.19	1.41
Q1-18	父親が酔っぱらって帰ってくる。	0.35	0.23	0.32	2.76	1.34
Q1-9	父親が使った割り箸を使う。	0.11	0.84	0.15	3.23	1.51
Q1-2	父親の飲みかけの飲み物を飲む。	0.20	0.83	0.18	2.93	1.51
Q1-5	父親が箸をつけたものを食べる。	0.37	0.74	0.25	2.37	1.33
Q1-16	あなたの布団（ベッド）で父親が昼寝をする。	0.21	0.56	0.34	3.68	1.35
Q1-20	あなたの下着と父親の下着を一緒に洗う。	0.17	0.11	0.66	1.93	1.06
Q1-19	父親が入ったお風呂のすぐ後に入る。	0.22	0.36	0.64	2.41	1.27
Q1-15	父親がおなら・げっぷを遠慮なくする。	0.27	0.26	0.61	2.80	1.39
Q1-7	洗濯後の父親の下着をたたむ。	0.36	0.24	0.42	2.18	1.26
	固有値	9.24	1.39	0.83		
	寄与率	46.18%	6.96%	4.17%		
	累積寄与率	46.18%	53.15%	57.32%		

② 父親に対する嫌悪感の因子構造（表1）

次に、この尺度の構造を調べるために因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、スクリー法により、3因子が抽出された。

第1因子は「Q1-6、父親と一緒にテレビを見ながら話をする」や「Q1-17、1日の出来事について父親と話をする」などの他に、「Q1-8、電車であなたのすぐ隣に父親が座る」や「Q1-12、父親の肩を揉む」などにも高い負荷量を示した。12項目からなるこの因子は、父親とのコミュニケーションや父親との接触との関連が高いことから第1因子を「父親とのコミュニケーションと接触に対しての嫌悪感」と命名した。

第2因子は「Q1-9、父親が使った割り箸を使う」や「Q1-2、父親の飲みかけの飲み物を飲む」などに高い負荷量を示した。4項目からなるこの因子は、父親との飲食との関連が高いことから第2因子を「父親が使ったものに対しての嫌悪感」と命名した。

第3因子は「Q1-20、あなたの下着と父親の下着を一緒に洗う」や「Q1-19、父親が入ったお風呂のすぐ後に入る」など4項目に高い負荷量を示した。下着を洗濯することや、お風呂などに関連することから第3因子は「間接的接触に対しての嫌悪感」と命名した。

(2) 父親に対する嫌悪感についての感情表出語

父親に対する嫌悪感についての感情表出語として、どのようなものがあるかを調べるために、日常的に体験されると考えられる感情表出語を独自に作成し、該当するものに○印をつけてもらった。「その他」として考えられる場合は、自由に記述してもらい、嫌悪感をおぼえない場合は「なし」に○印をつけてもらった。

その結果、感情表出語を1つも選択しなかったのは、17名(16.83%)であり、残りの84名(83.17%)は、何か1つ以上の項目に嫌悪感を持っているという結果を得た。しかし、0～2項目を選択した者の合計が72名(82.30%)であり、3項目以上を選択する者は、29名(17.70%)と少ないことが分かった(図1)。

次に、各項目の選択数について概観すると、「No.1 汚い:22名(21.78%)」、「No.2 うざい:23名(22.77%)」、「No.3 キモい:13名(12.87%)」、「No.4 面倒くさい:56名(55.45%)」、「No.5 臭い:27名(26.73%)」、「No.6 ムカつく:27名(26.73%)」、「No.7 下品:6名(5.94%)」、「No.8 イライラする:30名(29.70%)」であり、「No.4 面倒くさい」の1項目のみが、該当すると回答した者が、該当しないと回答した者を上回った。

ところで、「No.9 その他」の回答数は8名(7.92%)であり、具体的には①優しすぎて鬱陶しい、②おしゃれではない。身だしなみが良くなってだらしない、③気持ち悪い、④心の底から嫌い、⑤最悪、⑥自分が潔癖症だから嫌いと感じる、などであり、残りの2名は未記入であった。

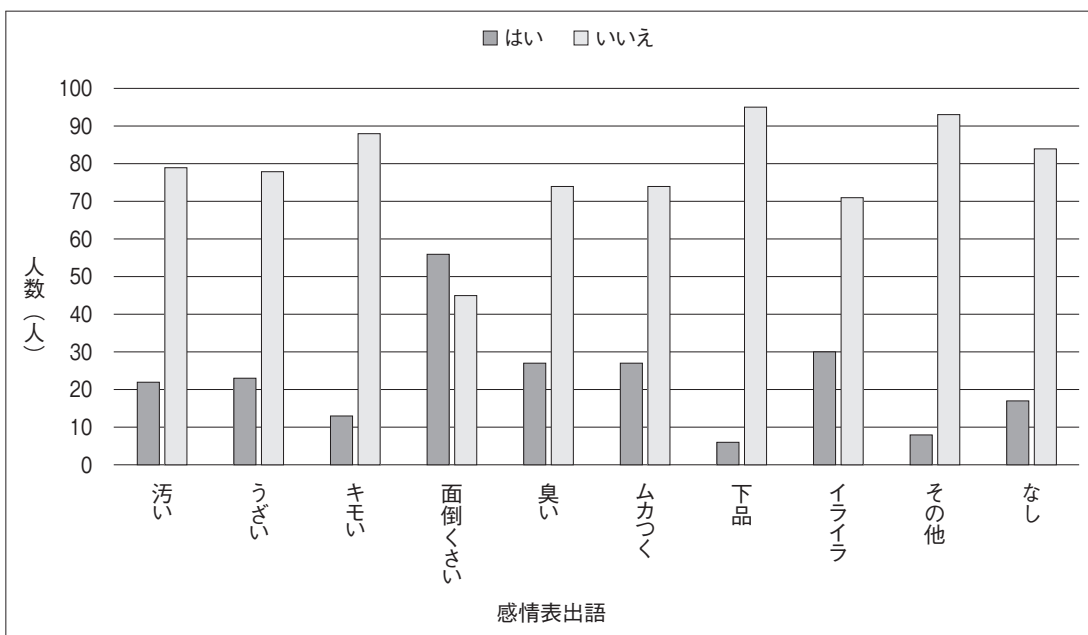


図1 父親に対する嫌悪感についての感情表出語の選択状況(複数回答)

次に何か1つ以上の項目に嫌悪感を持っていると回答した84名(83.17%)が、各項目に、どの程度、分布しているかを整理した。

その結果、「その他」を含む9項目中、1項目が該当すると回答した者が31名(36.90%)、2項目が24名(28.57%)、3項目が10名(11.90%)、4項目が6名(7.14%)、5項目が4名(4.76%)、6項目が5名(5.95%)、7項目が3名(3.57%)、8項目が1名(1.19%)、9項目すべてが該

当すると回答した者は0名（0%）であった。

そこで1項目のみ該当すると回答した31名（36.90%）をL群、2項目が該当すると回答した24名（28.57%）をM群、3項目以上が該当すると回答した29名（34.53%）をH群として、それぞれの群で嫌悪感の項目がどのように分布しているかを整理した（図2）。

その結果、L群の回答頻度で最も多かったのは「No.4 面倒くさい：19名」であった。その次は「No.5 臭い：5名」、「No.6 ムカつく：2名」などとなった。次にM群の回答頻度で最も多かったのも「No.4 面倒くさい：16名」であった。その次は「No.10 イライラする：10名」、「No.2 うざい：8名」、「No.6 ムカつく：6名」などとなった。最後にH群では、いずれの項目も回答頻度が高く「No.4 面倒くさい：21名」、「No.6 ムカつく：19名」「No.10 イライラする：19名」、「No.1 汚い：18名」、「No.5 臭い：18名」、「No.2 うざい：15名」、「No.3 キモい：12名」などとなり、最も選択頻度の低かったのは「No.7 下品：6名」であった。

以上のように、父親に対する嫌悪感についての感情表出語として、1つ位はあると回答したL群においては、「面倒くさい」というものであった。その面倒くささに、1項目加わったのがM群であり、その項目は「イライラする」「うざい」「ムカつく」のいずれかであった。そして、H群になると、これらに「汚い」「キモい」「臭い」「イライラする」が加わっていく傾向がみられた。

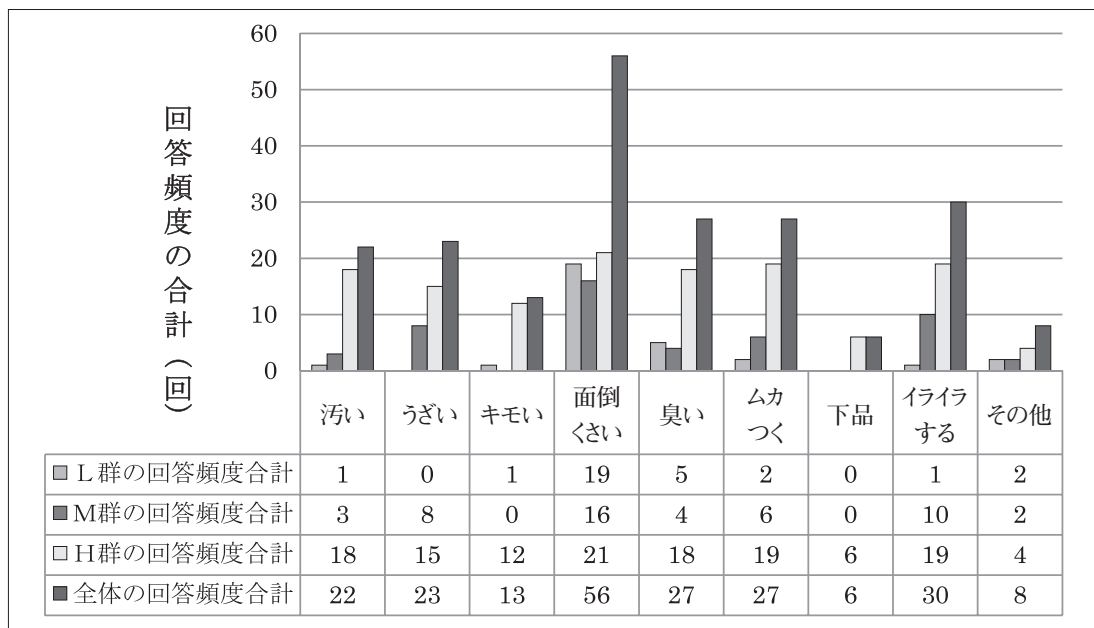


図2 感情表出語の回答頻度の違いによる選択項目の分布状況（複数回答）

### （3）父親に対する嫌悪感と両親の仲の良さの関係

父親に対する嫌悪感と、両親の仲の良さとの関係を調べるために、「父親に対する嫌悪感尺度」の合計得点を低得点群（20～48点；53名）と高得点群（49～100点；48名）の2つの群に分け、次に「両親の仲の良さ」が1～2点だった者、即ち「両親の仲が悪い群」（低得点群；25名）と、3点の中間群（18名）、4～5点だった者、即ち「両親の仲が良い群」（高得点群；58名）の3つ

の群分け、クロス集計を行い、 $\chi^2$ 検定を実施した（表2）。その結果、両親の仲が悪いと父親への嫌悪感が高く、両親の仲が良いと父親への嫌悪感が低いという傾向がみられた。

表2 父親に対する嫌悪感と両親の仲の良さの関係 ( $\chi^2=6.39, p<0.05, df=2$ )

		父親への嫌悪感		
		高得点群	低得点群	合計
両親の仲の良さ	仲が悪い	17名	8名	25名
		16.8%	7.9%	24.8%
	どちらでもない	9名	9名	18名
		8.9%	8.9%	17.8%
	仲が良い	22名	36名	58名
		21.8%	35.6%	57.4%
合計	48名	53名	101名	
	47.5%	52.5%	100.0%	

また両親の仲の良さや仲の悪さについて、なぜそう思うのか、該当する項目に○印をつけてもらったところ、両親の仲が悪いと思う理由について「いつも喧嘩している」を選択した者は8名、選択しなかった者は93名。「母親が父親のことを嫌っている」を選択した者は19名、しなかった者は82名。「母親が離婚を時々口にする」を選択した者は5名、しなかった者は96名。「その他」を選択した者は28名、しなかった者は73名であり、両親の仲が悪いと思っている理由として「母親が父親のことを嫌っている（19名）」が最も多かった。「その他」の自由記述としては、例えば

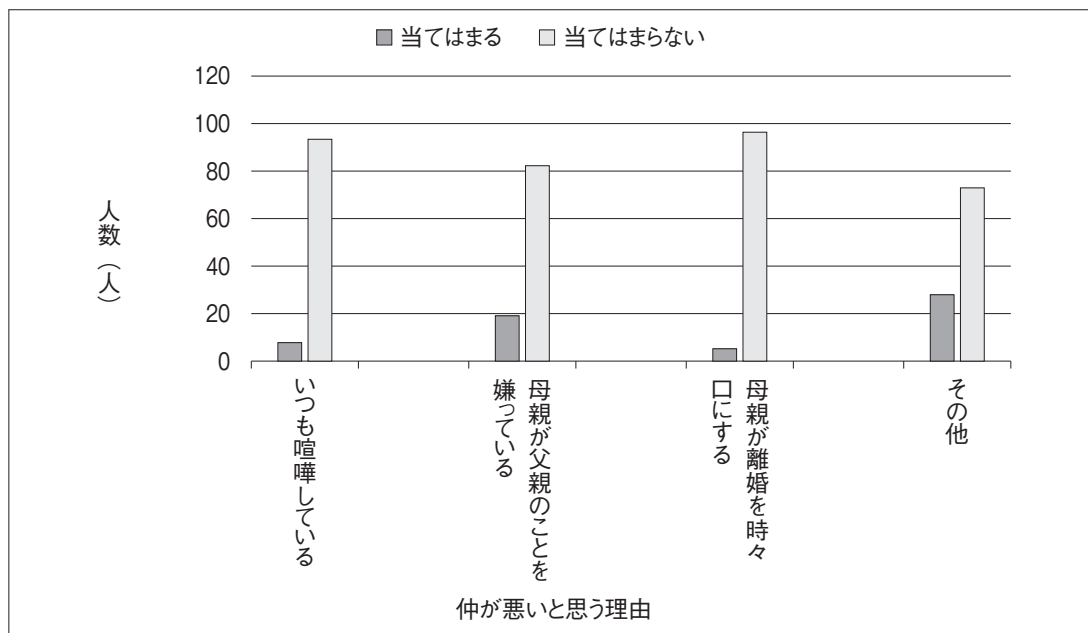


図3 両親の仲が悪いと思う理由

①「母親が父親のことをうざったく思っている」、②「母親が父親に対する愚痴をこぼしている」、③「母親が父親に対して暴言吐いている」など、「母親が父親を嫌っている」という回答であった(図3)。このように娘が両親の仲が悪いと思う要因として「母親が父親のことを嫌っている」という言語的あるいは非言語的表出が関連しているという結果が得られた。その他の自由記述欄には、「双方とも相手がいないうちに愚痴を言う」など、娘を自分の理解者に巻き込もうとする様子がみられた。また「父親が母親の悪口を言う」、「結婚指輪をはずしている」、「既に離婚している」などがみられた。

一方、両親の仲が良いと思っている理由として「一緒に出掛けている・買い物に行く(46名)」、「冗談を言い合ったり、よく話をしている(51名)」、「喧嘩はあまりない(32名)」などが多かった。「その他(25名)」の自由記述の中では、例えば①「週末2人で出掛ける」、②「一緒にご飯を食べに行く」、③「2人で旅行に行く」など一緒になにかをすることといった内容ものが多かった(図4)。このように娘が両親の仲が良いと思う要因として「記念日にプレゼントをしている」や「お互いに支え合っている」など、特別な行為をしているというよりは、むしろ日常のさり気ない言動が影響しているという結果であった。

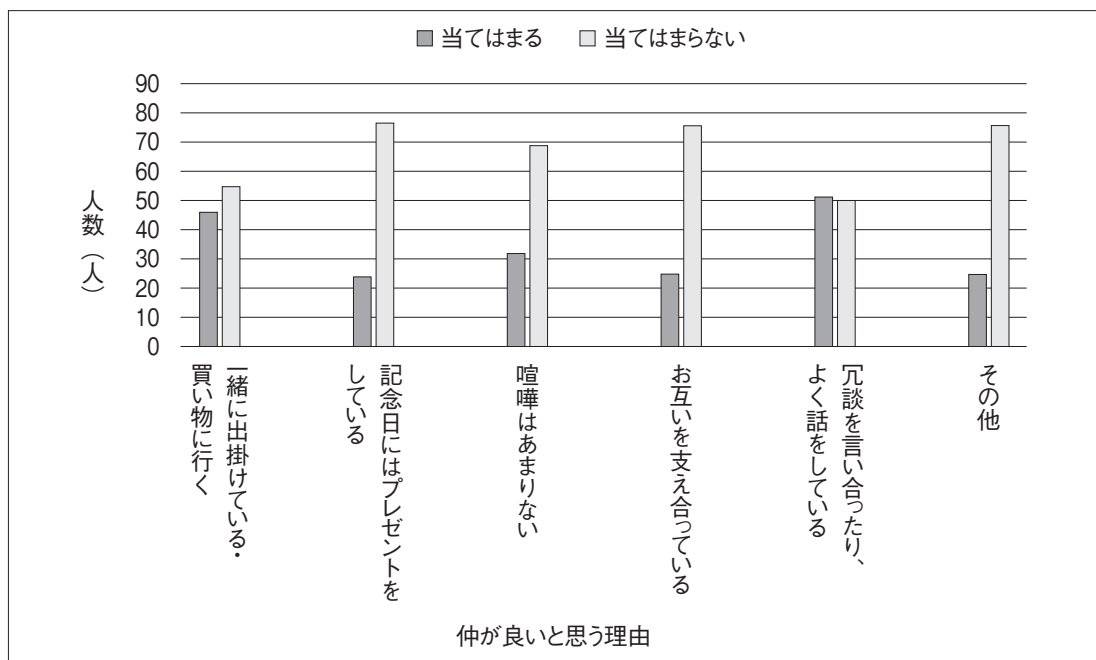


図4 両親の仲が良いと思う理由

#### 4、考察

##### (1) 父親に対する嫌悪感得点と因子構造

父親に対する嫌悪感尺度の20項目について因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行った結果、スクリー法により、3因子が抽出された。

その結果、第1因子は「父親とのコミュニケーションと接触に対する嫌悪感」であり、第2因子は「父親が使ったものに対する嫌悪感」であり、第3因子は「間接的接触に対する嫌悪感」であった。

まず、第1因子はコミュニケーションをすることと、接触することが組み込まれたが、父親と話をすることに対する嫌悪感得点が低いことが注目されよう。即ち、父親が娘との会話をしたいと思ったとき、娘の話題に無理に合わせることをするのではなく、「1日の出来事を話す」、「父親が自分の子どもの頃の話をする」ことなど、父親自身が自己開示することについては、娘は嫌悪感をおぼえないようである。そして、その機会として「テレビを見ながら話す」ということが有効であるようだ。

次に第2因子は、父親の使ったものに対する嫌悪感であったが、これらの項目はいずれも嫌悪感得点が高いことが注目されよう。それらは飲む、食べる、寝るに関わることであることから、「性」を連想させてしまうのかもしれない。父親はスキンシップを図っているつもりでも、娘にとって、こうした行為は不快だということのようである。これは第1因子に組み込まれた、「父親が自分の好みの女性のタイプについて話をする」や「父親があなたに「女らしくなったね」と言う」に対する嫌悪感得点が高いこととも関連している。つまり娘と自己開示をして、何でも話して良い訳ではなく、女性性についての話はタブーのようである。当然のことではあるが、娘は、仮に20歳を超えたとしても娘であり、父親の男性性の部分を開示されることに不快感を覚えるということではないだろうか。父親は男性ではあっても、性の対象ではなく、父親であることを娘は求めているということであろう。

最後に、第3因子の間接的な接触に対する嫌悪感に、「父親の下着を一緒に洗う」が組み込まれているが、嫌悪感得点が低いことが注目されよう。即ち父親が娘から「下着を一緒に洗うのが嫌だ」と言われるのは、娘の父親に対する嫌悪感がかなり高くなってからの最後通告であるのかもしれない。

## (2) 父親に対する嫌悪感についての感情表出語

父親に対する嫌悪感を表現する感情語として「はい」の回答数が「いいえ」の回答数を上回ったのは、「面倒くさい」の1項目であった。しかも、父親に対する嫌悪感についての感情表出語として該当するのは、1つ位だと回答したL群において選択された項目が「面倒くさい」であった。その面倒くささに、1項目加わったのがM群であり、その項目は「イライラする」「うざい」「ムカつく」のいずれかであった。そして、H群になると、これらに「汚い」「キモい」「臭い」「イライラする」が加わっていく傾向がみられた。

そこで、これらの行為の得点の相関分析を実施したところ、「イライラ」は「汚い ( $r=0.23$ ,  $p<0.05$ )、臭い ( $r=0.24$ ,  $p<0.05$ )、下品 ( $r=0.30$ ,  $p<0.01$ )、うざい ( $r=0.32$ ,  $p<0.01$ )、キモイ ( $r=0.40$ ,  $p<0.01$ )、ムカつく ( $r=0.49$ ,  $p<0.01$ )」など多くの項目と弱い相関がみられた。例えば、父親は娘から相談をされた時に、論理的なアドバイスをすることが求められているという思いで対応すると、感情を受け止めて欲しいと思っている娘にとっては、「そんなことを言って欲しいのではない」という「イライラ感」を募らせてしまうのかもしれない。その「イライラ感」は「うざい・キモイ・ムカつく」など多くの負の感情を引き起こしてしまっているのかもしれない。また、ほとんどの者が選択しなかった「下品」も「イライラ」と弱い相関がみられた。ひょっとすると父親は、「イライラ」しているのは、女性特有の反応だろうという思い込みで対応し続け、その結果、娘と父親の溝を深めているのかもしれない。男女のコミュニケーションのポイントが異なることを、男女共に理解すること、情報として共有することが重要なのではないだろうか。

そして「汚い」は「キモイ ( $r=0.44$ ,  $p<0.01$ )、臭い ( $r=0.33$ ,  $p<0.01$ )、ムカつく ( $r=$



0.28,  $p < 0.01$ )、下品 ( $r = 0.27$ ,  $p < 0.01$ )、イライラ ( $r = 0.23$ ,  $p < 0.05$ )」など多くの項目と弱い相関がみられた。つまり、先述したが、洗濯物を一緒に洗うのは嫌だと、娘が言うようになったということは、実は娘から、かなり様々な嫌悪感を持たれていることを疑った方がよいのかもしれない。

ところで、「面倒くさい」はほかの項目とは相関関係がない「独立したもの」であることが分かった。学生たちへの聞き取りによれば、「面倒くさい」という感情は「父親の独り言に対して反応をしないとイケない」と思った時に生まれる感情ではないだろうかという意見がある。父親自身も自分が面倒くさいことを言っていることはわかっているのかもしれない。母親と娘が密接に関係してしまうことで、父親の入る隙間がなくなり、家庭内で孤独になり、寂しいと感じ、かまってほしい、家族とコミュニケーションがしたいと思い、「そろそろ、お風呂に入ろうかなあ」などの「独り言」を言うってしまうのかもしれない。しかし、それを聞いた家族は「勝手に、黙って入れればいいのに」と思い、返事をしない、あるいは返事をするとしても、「勝手に入れればいいのに」とはっきり言うってしまうのかもしれない。その些細な繰り返しの中で、娘はイライラし、ムカつき、うざいと負の感情を増加させていくのかもしれない。

### (3) 父親に対する娘の嫌悪感と夫婦仲について

本調査では父親に対する嫌悪感の高さと両親の仲の良さ・悪さには関係があることが示された。最も多かった回答は、「母親が父親のことを嫌っている (19名)」であり、続いて「いつも喧嘩している (8名)」、「母親が離婚を時々口にする (5名)」であったことから、母親が父親のことをどのように娘に語っているかが、娘の父親に対する嫌悪感に大きな影響を与えていることが考えられる。娘と母親との会話は、母親が父親との関係性が悪ければ、母親は話し相手として娘を選び、娘に理解してもらおうとしているということであろう。母親が父親に対する不満を語ることで娘の父親に対する嫌悪感を増大させるということを、母親が自覚しているかどうかは別としても、母親が自身の味方に、娘を取り込む行為を取っていることが、娘の父親に対する嫌悪感を高めていることが推測される。

また、近年、父親が家事・育児を協力することが、母親にとって精神的に安定感をもたらすということが報告されているが、それも、娘が父親に対する嫌悪感を持たないための第一歩であるかもしれない。しかし、肝心なのは、母親自身が父親からサポートされていると感じなければ、母親の満足感は生じないということである。そのことを父親は自覚する必要があるように思われる。娘から見た、両親の仲の良さの具体的行動は、「冗談を言い合う」、「一緒に出掛ける」など日常の些細な出来事である。大上段に構えて「プレゼントをする」、「支え合う」などを実行することではないようである。

## 5、結論および今後の課題

父親に対する娘の嫌悪感は「両親の不仲」が背景にあるようである。また、娘が父親に対して嫌悪感をおぼえる行為としては、得点が高いものは、父親が男性の視線で娘に語りかけることであった。一方、嫌悪感の得点が低かったのは、父親自身の日常の出来事や子どもの頃の思い出話を語ることであった。つまり父親は娘に対して、自己開示をしてコミュニケーションをすれば、その内容が何でも良い訳ではないということがみえてきた。更に、その機会は、テレビを見ながら、さり気なくということのようである。

また娘が父親に対する嫌悪感をおぼえ始めるのは、「面倒くさい」という感情表現からのよう

である。その後、相談に乗って欲しいと思ったときの父親の対応が、感情を汲み取ることなく、論理的なアドバイスをするなどから、傲慢だ、上から目線の対応をされたと思ってしまうのかもしれない。そこで生じた「イライラ感」は「うざい・キモイ・ムカつく」を引き起こしてしまっているのかもしれない。そして「汚い」というところに到達してしまうのかもしれない。

本論文は、調査部分\*の精査を行ったものであり、今後の課題として第一は、娘に父親に対する嫌悪感を抱かせないためには、両親が仲良くすることであろう。しかし、両親には、両親の歴史があるので、両親に関係性を改善して欲しいと願っても、期待できないかもしれない。そうであるならば、両親の問題は夫婦の問題として捉え直し、父娘・母娘の関係と混乱させないように、娘が変わることが大切なかもしれない。

第二に、娘が母親とばかり仲良くするのではなく、また父親と距離を置かず、娘が青年期(思春期)に、進学や就職の相談を、社会人の先輩として、父親に対して、積極的に相談にのってもらうことが良いのではないだろうか。多くの場合、社会のことをよく知っているのは社会人としての経験が豊富な父親である。時として、感情の部分だけ理解してもらっても、解決できないことがある。時には論理的であることも、厳しく対処しなければならないことも必要である。その対応は父親が優れているのではないだろうか。但し、父親は娘の話し相手になり、アドバイスをするとき「こうしなさい」などの威圧的、あるいは「だから女の子はダメだ」などの否定的な言葉がけをすることによって嫌悪感を抱かせてしまい、折角のチャンスを失ってしまっているかもしれない。言葉掛けに留意する必要があるということが示唆された。

#### 【引用文献】

- ハーツ, レイチェル (Herz, Rachel Sarah) 著 綾部早穂監修 安納令奈訳 (2012). あなたはなぜ「嫌悪感」をいだくのか, 原書房.
- 石丸綾子 (2013) 女子大学生の父親への否定的感情に関する研究——現在と中学時代の回想を比較して——九州大学心理学研究, 14, 125-137.
- 小野寺敦子 (1984) 娘からみた父親の魅力 心理学研究, 55(5), 289-295.
- Rozin, P., J. Haidt, McCauley, C. and Imada, S. (1997). Disgust: The cultural evolution of a food-based emotion. In Helen Macbeth (Ed.), Food preference and taste: continuity and change. Providence, Oxford: Bergahn Books. pp.65-82.
- 菅生早映子 (2001) 父に対する娘の嫌悪感について 追手門学院大学心理学論集, 9, 11-17.
- 白田明子 (2014) 思春期に「父の下着と別洗い」が起きない家族の秘訣. 『日経 DUAL』2014年12月18日.  
<http://dual.nikkei.co.jp/article.aspx?id=4323,4323&page 2,4323&page 3>.
- Wedekind, C. & Furi, S. (1997). Body odour preferences in men and women: Do they aim for specific MHC combinations or simply heterozygosity? Proceedings of Royal Society of London B, 264, 1471-1479.

\* データ収集は、卒論調査を兼ねて実施したものである (岡部亜由巳: 臨床心理学科47回生)